

長野県植物誌改訂 研究史資料 4：高橋 勸

中村 千賀*・井田 秀行**

長野県植物誌改訂に合わせた研究史の増補にあたり、県内の植物調査でご活躍されてきた諸先輩方から、当時のようすの聞き取りを行うこととなった。第一回目として飯山市や下水内・下高井両郡を中心に長年植物調査をされてきた、飯山市在住の高橋勸先生から、ご自身の植物研究や身近な自然の変化などについてお話をいただいた。本稿はその聞き取りを中村がまとめ、高橋先生に加筆修正をしていただいたものである。高橋先生にはお忙しい中ご協力していただいたばかりでなく、貴重な資料をご提供いただいた。深く御礼申し上げる。

高橋 勸氏 略歴：

1929 年（昭和 4 年）飯山市生まれ

旧制飯山中学校卒

信州大学教育学部、玉川大学文学部教育学部の通信教育を受講し教員免許を得る

長野県飯山市、飯田市、諏訪市、野沢温泉村、中野市の小中学校に勤務

昭和 44 年 東京都立大学牧野標本館へ 1 年間の内地留学

信濃教育会臨地講習会地元講師を務める

飯山市自然保護審議会会長、飯山市環境審議会会長、飯山市文化財保護審議会会長職務代理、木島平村文化財保護審議会委員、豊野町町誌編纂委員会顧問などを務める

高橋勸先生からの聞き取り（写真 1）

日時：2019 年 12 月 6 日（金）

10 時～12 時 15 分

場所：高橋先生のご自宅

聞き取り者：井田秀行・中村千賀

1. 教職と植物研究

戦後、旧制飯山中学校を卒業したが、学校が荒れていたため、東京の学校へ進学した。しかし東京は焼け野原で親戚の家に世話になるのも難しく、休学



写真 1. 高橋勸先生宅での聞き取りの様子。

して飯山へ帰郷した。昭和 22 年、学校教育法の施行により 6・3 制になると、教員不足もあり、地元の太田小学校の校長から頼まれ教員となった。初め教科書の軍国主義の内容に墨で線を引くこともした。紙の質も悪かった。冬は積雪が多い中、ゴム長靴は貴重品扱いで履いている者は少なく、下駄箱に入れておくと盗難に遭うので、藁草履の上履きに履き替えなくてもよかった。ゴム長靴は各クラスへ 1、2 足ずつ配給となり担任は配分に困り、クラス全員の前であみだくじを引かせて当選の児童に配給券を渡したものである。ゴム長靴がない児童は、藁製のゴンゾやコンゴと呼ばれた藁沓を履いたので、上履きの藁草履やトモロコシの皮で作った草履に履き替えた。掃除の時、藁のごみが多くて大変であった。通信教育や免許法認定講習で教員免許を取得した（写真 2）。信州大学教職員通信教育では中学の免許取得ができなかった（理科は取れたのか？スクーリングの記憶や単位取得証明がある、写真 2）。とにかく「社会科」は玉川大学のスクーリングなしの通信教育で取得した。

最初の勤務地、太田小学校に、丸山利雄先生を師と仰ぐ外様村（現飯山市）出身の丸山英先生、富倉出身の丸山昇先生（共に志願の海軍士官で、長野師範繰上げ卒業）がいらして、一緒に調査を行った。ときに丸山利雄先生も植物調査に同行され、また、同好の士とも云うべき横内齋先生（木曽生物研究所）も度々講師としてみえた。でかけるのは日曜日と農繁休業中で、歩いて富倉を経て妙高まで行くこともあった。丸山利雄先生が信大附属小の副校長から常盤小学校の校長に異動となり、丸山先生の手引きで

* 長野市立博物館分館 戸隠地質化石博物館

〒381-4104 長野市戸隠栃原 3400

** 信州大学教育学部 〒380-8544 長野県長野市西長野 6-1-1

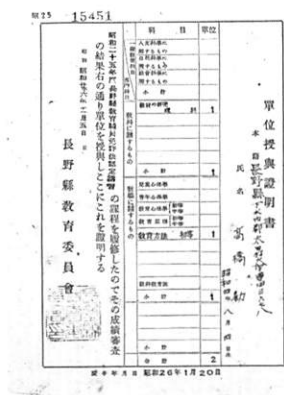


写真2. 昭和26年長野県教育委員会発行
単位授与証明書。

常盤小学校に勤めることになった(写真3)。

植物採集を始めた当初、先輩方のような胴乱を持っておらず、代わりに軽機関銃の弾倉を使った。その後、飯山市外様のブリキ屋で胴乱を作ってもらったが、重くて困った。はじめ丸山利雄先生に胴乱の使い方、例えば水にぬらした新聞紙半枚に標本を挟めば一週間もつ、などのことを教えてもらった。カメラも購入し、あちこち撮って歩いた。最初は愛宕町のカメラやでライカを購入した。最後はキャノンを使った。

昭和27年、下水内教育会の郷土誌調査委員会の中に、生物調査委員会がつくられ、郡内の植物調査が始まった。横内齋先生と、横内先生に招かれて県内に来られるようになっていた当時東京大学大学院生の水島正美先生と一緒に歩いた。先生方が植物名をあげるのを記す、「書き役」だった。横内齋先生と水島正美先生がオクノサワフタギ、コシジロコロ、チシマウスバスマレを発見されたときは、その書き役をした。雨の中だった。

丸山利雄先生から「北信の教員は娼捨越えをしないではいけない」と言われ、昭和31年に飯田市の竜丘小学校へ赴任した。担任をもった6年生に、掃除の時間、「先生、机つっていい？」と聞かれたりと、言葉も風土も異なるので多少とまどうこともあった。下伊那教育会の生物委員会に所属したが、伊藤文男先生がいらした。当時は南アルプスや遠山谷あたりを調査した。(泰阜村南部) 万古川のイワナをおかずに電灯のない山の分校に泊まって鍋飯を食べたことも思い出となっている。

次の赴任地の諏訪では、八ヶ岳の赤岳、霧ヶ峰の七島八島などを調査した。八ヶ岳でクロユリやウルップソウを採集したのは思い出深い。貴重品を採集する際には事前に営林署に届け出を出すのだが、



写真3. 昭和29年11月 常盤常盤小学校卒業
記念写真. 向かって右が高橋勸先生、左
が丸山利雄先生。

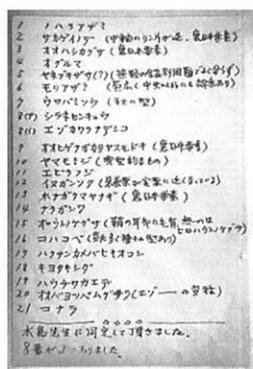


写真4. 昭和45年3月 丸山利雄先生宛に高
橋勸先生が出された手紙、水島正美先
生による同定結果を記している。

だいたい許可が出た。今では難しいだろう。また、飯山出身の大口嘉雄先生と一緒に、諏訪湖にモーター船を出して、初の湖面全域調査を行った。当時のほうが今よりも水質が悪かった。上諏訪の渋から出発し、岡谷で昼食をとって帰ってきた。上諏訪の渋、下諏訪の低川の辺りには植物が多かったが、岡谷側では少なかった。

諏訪では板状にはがれやすい鉄平石を標本づくりの重しに使った。先輩方がしていたことを真似たもので、新聞紙の半折り大に石屋で切ってもらって重しを作り、押し葉作りに使った。

郷里に戻ってからも苗場山の植物調査などが続いた。こうした調査がきっかけで、県教委へ牧野標本館館主の水島正美先生の要請が利いて、丸山利雄先生他、理科関係の先生方の後押しもあって、昭和44年に東京都立大学の牧野標本館へ1年間の内地留学ができた(写真4)。内地留学中は、牧野標本館に長野県出身で都内在住のかたと同室で、殆ど同じ行動をとっていた。彼に誘われて都内、神奈川県内の植物の生態学調査に出向いた。「東京植物友の

会」にも入会した。ただ、東京では胴乱を持って電車に乗ると変な目で見られるので、胴乱は持たず、大きなリュックと野冊を持って採集にでかけた。

標本研究や生態学調査以外は理学部の授業に出た。階段式教室、90分授業（講義）、ゼミは私にとって初の体験で、新鮮だった。標本研究では夏の暑い時期、恒温・恒湿の標本室での標本調べは最高だった。理学部長の宝月欽二先生は、歴史学者宝月圭吾先生（常盤村史著者）の弟さんで、お父さんが飯山高等女学校校長をされたとお聞きした。大学では宝月欽二先生には植物生態学を学び、長野市のご出身ということもあって、よく話かけて頂いた。分類学は水島正美先生、分類学実習は小野幹雄先生などにお世話になった。

教員をしながらの調査であったが、教職は今のようには忙しくはなかった。教員として必須なものは少しで、「三種」の勉強をすれば十分と言われた。「三種」とは「人としての教養（哲学・倫理・仏教学等）」、「専門の学（地学・生物・天文・書・絵画・文学等、自分が専門とする学芸）」、「指導方法（教材研究・教案研究等）」である。若いころは「出家とその弟子」（倉田百三著）とか、親鸞聖人の「歎異抄」などの読み合わせが、職員全体または各グループで行われた。

教員退職後、1998年にゼンマイ採りの人に教えてもらい、市内のトガクシソウの生育地の確認を行った。雪解け直後の沢沿いを木の枝を持ち上げながら登って行ったので、非常に時間がかかり、苦労した。信大の和田清先生へ標本を送ったが、松本の標本庫にあるだろうか。根まで採集したか記憶になく、気になっている。

春に飯山市内の湿原の近くでコゴミ採りをしていて、ミヤマカタバミの紅花品種の群落を見つけたときには驚いた。チシマウスバスミレは県内初として野々海湿原（用水池造成前）で見つかったものだが、現在野々海池周辺では見られない。カヤノ平では見られる。ツルタチツボスミレは野々海でかつて採集されていたことを、内地留学の際に牧野標本館の小林純子氏に教えられ、「高橋さん、帰ったら探して」と言われていたが、これまで見つかっていない。

2. 飯山近郊の植物相の今昔

昔に比べて風景が大きく変わった。今はヤブカンゾウばかりだが、ヤブカンゾウだけでなくノカンゾウも昔は多かった。イヌノフグリは昔はたくさんあった。今はオオイヌノフグリかタチイヌノフグリばかりで、イヌノフグリを見なくなった。ユウスゲ

も昔はたくさんあった。

逆にカタクリは今のほうが多い。昔は林の下の方の縁部や墓地のわきなどに少しあるだけだった。山際の畑をやめたところなどで増えている。観察会を開いている五束神社の林でも、もとは多くなかった。観察会は井田先生に引き継いでもらっている。一生懸命にやってもらって、遠方からの参加者も増えて盛会になってきた。

稲を干すはざかけの縦棒に、生きた立木を使っていた。自宅周辺ではハンノキが多く、チャンチン（地方名：りょうがん）を使う家もあった。ハンノキはかつて実をお歯黒にも使ったのだらう。昔、修学旅行で越後平野を訪ねたときに、農道わきにずっと植えてあった光景が印象深い。自宅周辺では現在もわずかに残っている。

家の裏の林に、母親が子供の頃、近所の友達とブナの実拾いに行き、ほうろくで炒ってもらっておやつに食べた。おいしかったと話してくれた。

3. 戸隠との縁

植物研究会にとって戸隠は、一度は行ってみたいところで、自分も何度もお世話になっている。戸隠山には二度登った。丸山英先生と初めて戸隠に行ったときに、鋸歯の大きな葉の植物を採集してきて庭に植えたら、どんどん増えてノコギリソウだとわかり、今も絶えないで残っている。

実家の神職を継ぐために平成3年に戸隠神社で一か月間の研修を受けた。5月だったがエゾハルゼミがうるさく驚いた。松井宮司から戸隠の宿坊の各家の苗字について、由来を教えてもらった。戸隠小唄も教わったが、いい唄だった。別当だった久山家の大杉の根元には、トガクシソウが咲いていた。

高橋家は奈良時代から続くとされる神官の家系で、自分が35代目に当たる。しかし古文書を読む限りでは、鎌倉時代からとみるのが妥当だろう。家に伝わっている古文書はおよそ読んだ。5代前の家には後継ぎとなる男児が生まれず、戸隠の奥院へ裸足参りをしたこともわかった。その際に観法院、現在の神原家へ泊ったことも記されていた。少し前までこの地区では戸隠講があり、班長になると皆を連れて戸隠さん参りをし、御神籤をもらって来て地区の家々に配った。江戸時代には別当家（今の久山家）に行っていたが、明治になると神原家へ行くように変わったという。

現在も家に伝わる古文書を読み、神社や地域の歴史についてまとめている。飯山城の第13代城主、

尾崎政重は、この近くに山城風の寺を作り自らの隠居寺として神主の上の別当になった。現在の二の鳥居近くに甲乙人に対する禁制を立てたといったことも、古文書からわかった。満で90歳となり、この頃は足腰も弱ってきた。宮司の職を返上するよう神社本庁へ願い出て、令和元年12月31日付で宮司を辞した次第である。

業績リスト

【著書】

雪国飯山の植物－ブナ林を歩く－（2000） 信毎書籍出版センター

【共著】

斑尾山系の自然（1975）飯水教育会編集・発行
鍋倉山系の自然（1979）飯水教育会編集・発行
野々海・貝立の自然（1982）飯水教育会編集・発行

雪国の自然（1986）飯水教育会編集・発行
飯山市誌 自然環境編（1991）飯山市誌編纂専門委員会編集、飯山市・飯山市誌編纂委員会発行
豊野町の自然 豊野町誌1（1997）豊野町誌刊行委員会編集・発行

飯山市の自然（1998）飯山市の自然編集委員会編、飯山市教育委員会発行

山野の植物と人の生活－古家を解体して思う－（2004）山の恵み－奥信濃飯山の自然と文化－ 笹本正治監修、飯山市編集、ほおずき書籍株式会社

【論文等】

「信濃教育」（信濃教育会）
1966 奥信濃における帰化植物 952：64-70
1989 十八番の研修 1228：58-61
「高井」（高井地方史研究会）
1999 桜考 128：73-76
2000 千曲河東西の植物分布 130：66-75

2000 飯山地方の一世紀にわたる植物研究の概要 132：37-42

2001【資料紹介】健御名方富彦神別神社の俳額 134：15-18

2002 木島平山地の湿原植物 138：45-49

2003 江戸後期における飯山城本丸の神社について 144：53-58

2006 江戸期における復古神道と社号問題 154：16-34

「文化財信濃」（長野県文化財保護協会）

1999 小菅のヤマグワ 26：19-21

「奥信濃文化」（いいやま博物館友の会）

2002 飯山の巨木・名樹・珍樹 2：16-28

2003 江戸期における飯山城内の神社について 3：34-40

2004 ふるさとを想う（その一） 4：34-38

2005 ふるさとを想う（その二） 5：1-9

2006 飯山地方における伊勢信仰－伊勢講を通して－ 6：1-13

2007 奥しなの植物研究紀行（その一） 7：10-16

2007 奥しなの植物紀行（その二） 8：1-12

2009 五束のおごしんさま 12：1-4

2010 飯水地方の森林と杉の話 13：1-5

2010 江戸後期の国学隆盛と社号問題 14：1-8

2011 米沢と南陽市宮内を訪ねて 15：1-8

2011 飯山の「おてんのさん」－祇園祭－ 17：1-6

2012 石造文化財「記念碑と玉垣」－明治三十七、八年戦没－ 18：1-4

2012 外来植物&希少植物 19：8-14

2013 郷土文献を省みる 21：8-12

2014 善光寺地震実録－地震体験と記録を通して－ 22：1-7

2014 “大境郷”を考える 23：1-7

2016 県下最北「五束の御柱」 26：1-8

「日本森林学会誌」（日本森林学会）

2010 ナラ枯れは江戸時代にも発生していた 92：115-119. 井田秀行・高橋勸共著